二〇二二年七月八日

涙ごと汗を拭ひて試合果つ　ひのと
白南風の沖に水脈曳く貨物船　素秀
朝涼や銀輪飛ばす下り坂　あひる
除草剤使はぬと決め草を引く　うつぎ
洛中の灯ともし頃や鱧料理　澄子
戻り梅雨暴れ足りぬと地を叩き　かえる

二〇二二年七月七日

七夕や星より早く船灯る　ひのと
点滴を受けつつ眺む夕焼かな　みきお
白南風やデツキブラシのリズムよし　む べ
尺取りの後ろ見んとて背伸びする　明日香
傘寿とて娘に贈られし白日傘　はく子

二〇二二年七月六日

一円玉誰も拾はず径涼し　たかを
笹見へぬ程に短冊星祭　みきえ
七夕の大笹飾る駅舎かな　みきえ
百合の香に包まれて笑む遺影かな　もとこ
奈良墨の艶の涼しき葉書くる　澄子
夕立雲去りてぽつりと白き月　なつき

二〇二二年七月五日

子等の声たちまち遠き夕立かな　ひのと
短冊の墨の香ゆかし星祭り　澄子
苔涼しわらべ地蔵に日の斑　素秀

二〇二二年七月四日

短冊をはみ出す願ひ星祭　みきお
蛍火の虜となりて佇つ水際　千鶴
冷麦に添えられてゐし茗荷の子　かえる
四散すも集ふも速しめだかの子　あひる
凌霄花散り重なりし地のほむら　満天
水出しのお茶のさみどり半夏生　なつき
奔放に育ちくの字のきゅうりかな　せつ子
舌かへて風鈴機嫌よくなりぬ　みきえ
浜涼し声揃の揃ひし地引網　みきお
穴のあくほどに翡翠睨みをり　明日香
海開きなれど沖波寧からず　素秀

二〇二二年七月三日

流木のオブジェとなりし旱河　素秀
幼子がキスして食べるさくらんぼ　なつき
白南風や舳先に靡く大漁旗　智恵子
待望の雨連れて来し半夏生　みきえ

二〇二二年七月二日

冬瓜の売れ残りたる八百屋かな　澄子
浮気して離るるもあり蟻の列　もとこ
水着からしたゝる水や夜の三和土　ひのと
寝返りの度に捩れて夏布団　素秀
脚もとに空蝉すがる朱の鳥居　智恵子

毎日句会みのる選・二〇二二年七月一〇日